
銀色の翼

市野川 梓

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀色の翼

【Nコード】

N8973Z

【作者名】

市野川 梓

【あらすじ】

惑星同士での戦争が日常化した時代に生きる人と人とが生み出す翼という幻影…

人々は再び平和な日々を取り戻す事ができるのか

第一章完結までは猛スピードで投稿しています

調子が良いときは一日4話ぐらい更新する事もあるかと…

最低でも一日1話は必ず更新しますのでヨロシクです

機械の翼

あれから30年という月日がたった。この時代において「30年」と言う月日は旧時代にとつて一世紀同等の時だ。惑星同士の宇宙対戦が幾度となく勃発し、星々はそれに追われている。地球と言う星は壊滅状態に陥っていた。決して地球の軍事力や技術が遅れている訳ではなく、ある一つの星が強すぎたのだ。

その星を「ゼアール星」と言う。ゼアール星と同盟を組む星は増え続け、今や銀河系のほとんどがゼアール星連邦軍だ。ゼアール軍は100億という軍勢で地球に攻めてきた。連邦軍に対抗する地球・宇宙警察軍は10億と言う1/10の軍勢で挑んだ。

第五次宇宙大戦に。

この戦いの犠牲は計り知れない。ゼアール軍は機械兵で構成されている。ゼアール兵は殆んどが肉体の半分以上が機械に蝕まれた機械人間アレキーマンなのである。身体に鉄を流し込み、強靱な肉体を手に入れた馬鹿な人間は頭がイカれている。感情がないのだ。嬉しい、悲しい、楽しい、そして苦しみ。あえて感情があると言うならば殺意だけである。逆に地球・宇宙警察軍、通称「EARTH軍」に機械人間はいない。感情を持つ人間である。…表向きはそうなっていた。しかし世界政府がひた隠し続けている世界機密にはEARTH軍にもただ一人だけ機械人間が存在すると言われている。民間にはもちろん知られていない。日本人でまだ18歳という若い人間である

40XX年4月20日

今日は広瀬佑助の18歳の誕生日である。たった一人で祝っていた。家族をゼアールに殺され友達もみんな徴兵へ行ってしまった。だから身内なんていなかった。少年は幼少期から親に宇宙警察について教育され、今や宇宙警察の最年少の暗殺部隊に所属している。

決して運動能力が優れているわけでもない。昔から小柄な身体だった。何故ゼアールの魔の手から逃れることが出来たのか…それは彼が地球にいる唯一の機械人間だったからであろう。体右半分が機械である。

紛争に巻き込まれて右半分が動かなくなってしまった。父が素晴らしい功績を納めていたためか、世界政府から生え抜きの医者が派遣され大手術の後、この身体になった。わすが九歳の頃の話である。今は宇宙ステーションで暗殺部隊をしている。本人すらよく知らないが暗殺部隊は四人しかいないらしい。佑助は自分が優れているなんて思ったことがない。ましては普通の人間でいたかった。しかし家族の復讐に燃える佑助にとってこれ以上にならない上手い話だった。EARTH軍は7部隊に分かれている。それぞれの部隊に隊長がいて暗殺部隊の人間は全員隊長である。佑助は5番隊の隊長を任されている。あまり知られていないが、第8番隊が特別暗殺部隊である。佑助が機械人間だと知っているのはEARTH軍の隊長、世界政府の上層部の人間ぐらいしかない。

状況は悪化している。EARTH軍の最終防衛ラインがゼアール軍をなんとか地球への侵入を防いでいるが、もうそれも一ヶ月と持ちそうにない。まだ地球には残された人々がいる。緊急措置として簡易人工星「イージス星」に避難させている最中なのだ。

暗殺の翼

PM7:15 宇宙ステーションにて

『505号室 第5番隊隊長 広瀬佑助』

とモニタリングされた部屋で佑助は暮らしている。EARTH軍にとって暗殺部隊「Super Nova」のメンバーは宝である。故に身の安全は保証されている。あくまで基地内においてであるが。

暗殺部隊Super Novaの仕事は名の通り暗殺である。宿敵ゼアールの元帥を殺すのが最終目的だ。今回の任務はゼアールの中核部隊長暗殺を命じられているが成功確率は極めて0に近い。Super Novaは今まで1000以上の人を暗殺してきた。そんなベテランでも成功確率が0.009%しかないのだ。命令は4月21日AM10:00に宇宙ステーションを出発である。

突然サイレンが部屋中に鳴り響き静寂を破った。一瞬緊張が走る。「侵入者か！」

折角の誕生日パーティーが台無しである。そつとケーキに刺さっているロウソクの火を消した。

『侵入者ハッケン！侵入者ハッケン！タダチニ5番隊長ハ侵入者ハイジヨニツトメロ！隊員ハゼンイン配置ニツクヨウニ！』

不器用なアナウンスが部屋にこぼれてきた。

「へいへい」

そう言つて佑助は壁に設置された宇宙ステーションの地図を見ると動いている赤い点を見つけた。

宇宙ステーション内への侵入者の排除は暗殺部隊の役目である。自動ドアが開いて部屋を出た。するとすぐ横のシャッターが降りて道を塞いでしまった。佑助は廊下の脇についている小さな鉄板の上に乗った。すると佑助を乗せた鉄板は動き始めた。時速80キロはでている。ここ宇宙ステーション通称、守護者達の基地（ガーデ

イアンズコロニー（以下GC）は輪の形をしている。輪の中心部はGCの心臓部である指示棟となっている。何万という人を収容でき、とてもじゃないが歩いて移動はできない。だからこうした移動手段がある。

今回の侵入者のパーソナルレベルは3。結構高い数値だ。パーソナルレベルは最高で5。いままで存在が確認されていない程の力の持ち主であろう。最弱の1でも生命力は普通の人間の10倍はあるだろう。

侵入者はもちろん機械人間であると推測でき油断はできない。

佑助は侵入者を見つけるなり、侵入者目掛けて小型ナイフを投げた。侵入者はそれに気付きナイフをかわそうとするがもう手遅れだった。侵入者である機械人間はその場でバラバラになり鉄の混じった血が辺りに散らばった。そのとたん何処からわいたのか掃除ロボットが死体を綺麗に片付け始めた。

すると廊下を赤く染めていた緊急ランプが消え再び静かなGCへ戻った。

ガラス越しに宇宙を見ると地球の近くで戦闘が行われているをはつきりと確認することができる。この基地から也大勢の兵が駆り出されている。また戻ってこれるのはよくても10人くらいしか居ないのだろう。

佑助が物思いに耽っていると、肩を叩かれた。振り返るとそこには第3番隊隊長 武蔵 大和の姿があった。

劇薬の翼

大和は劇薬などの危険物を専門に研究している。いつもコートの中に危険物を隠し持っている胡散臭い奴だ。

あまり仲も良くなく話す気もならない。しかし腕は確かで今までの暗殺において重要な役割を十二分に果たしてきた。

実戦訓練でも佑助の記録を遥かに超えている。バカには出来ない。

姿は何週間も手入れをしていなそうな汚れた顔。無精髭を生やし、白衣は継ぎ接ぎだらけでボロボロ。暗殺部隊なんて高い配給の方なんだから買い替えれば良いのに…なんて会う度に思ってしまう。

片手には試験管。中にはいかにも危険そうな紫の液体が入っている。大和は暫く佑助の顔を見つめると急に喋りだした。

「やあ、ユウ。例の頼まれていた薬出来たよ。いままで作った薬のなかでも指折りの猛毒になったあ」

枯れた、しわくちゃな声。

「それはどうも。案外早かったな。」

佑助は礼を言い怪しそうな薬を受け取った。大和は少し小声で

「そのクスリ…ちよいと法…破ってるからあんまり人前で使わないようにね。」

と忠告してきた。

「殺すか殺されるかって状況で法なんて守ってられるかよ。」

素っ気なく返してまたレールに乗って部屋に帰ろうとした。

すると通信で召集がかかった。指令棟からのようだ。また大和が割り込んできた。

「指令棟から？間違ってもボスなんか…」

佑助は溜め息をついて

「分かってるよー」

と心ない返事をして指令棟に向かった。

佑助は巨大な扉の前に来た。扉の端にはパーソナルレベル4の兵士が立っている。こいつらはSuperNovaでも苦戦を免れないくせ者だ。相手にはしたくない。端に居る無愛想な兵士に話し掛けた。

「第5番隊隊長、広瀬佑助だ。ボスに呼ばれてやって来た。」
門番はまた顔色一つ変えずに

「では部隊長手帳を見せて貰えますか。」

はあと小さい溜め息をついて佑助は胸ポケットから小さな手帳をだした。

手帳には顔写真、名前などが載っており、個人の証明にも使われている。

しかも部隊長の手帳は特別仕様で裏にSuperNovaのマークと部隊長証が彫られているのだ。

「これは失礼しました。では3ドア開きます。」

すると目の前の巨大な扉は音を立ててゆっくりと開いた。

軌跡の翼

扉の中には巨大な「コア」と呼ばれている言わば、GCの心臓がありそれを囲むように大量のオペレーターが常時待機している。みな佑助には眼もくれず忙しそうにモニターに向かって話し掛けている。そのオペレーターの間をすり抜け奥にある小さなドアの前に佑助は来た。

ドアの横に設置された指紋認証と眼球認証、声帯認証と言う厳重なロックを通って中に入る。

中には一つのデスク、椅子、そして一つのモニター…座っているのがこのEARTH軍最高指令隊長である。

名は誰も知らない。故にボスと呼ばれる。パーソナルレベルは限りなく5に近い、4++++と言う人類最強の人物だ。

噂では19歳と言う若さでこの役職を任されたほどらしい。とてもみなに信頼されており、佑助自身も信頼し尊敬する憧れの人物だ。

滅多に個人には通信をいれない総隊長に呼ばれ、少し緊張気味の佑助はゆつくりと敬礼をした。

「只今、第5番隊長、広瀬佑助、参上しました。」
総隊長は少し口角を上げた。

「おお。ようきた。折角のオフに呼びつけてすまない。緊急の連絡でな。」

部屋は小さな明かりが一つしかないため、あまり総隊長の表情を確認することが出来ない。

「と言いますと…?」

「それが、四日前にゼアールに偵察に行った軌跡が帰って来ないのだよ…。通信も途絶えてしまい、安否の確認もとれない状況でな。」
心なしか総隊長の声が震えている。

「SuperNovaの二人には事前に伝えてあるのだが、ゼア―

ル星への作戦の日程をずらして三時間後にここを発ってもらいたい。

「

キセキ…名前は藤咲軌跡。第7番隊隊長でSuperNovaの隊長も務めている。悔しいが最も総隊長に力が近い人間であろう。パ一ソナルレベル4以下の相手ならあまりの殺気で剣を抜くことすら儘^{まま}ならない…。今、EARTH軍で総隊長を除くレベル5に最も近いのはキセキだという説が有力である。現にキセキは総隊長の一人息子なのだ。

そのキセキが任務から帰還しなかった事など今までなかった。心配になるのが普通だ。

「で、君に臨時隊長を務めてもらい、キセキを救出してもらいたい。…戦争に私情を挟んではいけないのは充分承知してるんだがな…。」
総隊長は心配性な事で有名だ。しかしその隊員一人ひとりに対する愛情がこの人を惹き付ける一つの要因なのかもしれない…

「問題ありません。キセキはボスの息子さんである以前に我らのチームメンバーです。メンバーの為にならこの命懸けて助けになりましょう。」

「社交辞令でも嬉しい。では船はセンターに用意してある。準備ができしだい出発してくれ

彼女の翼

こうして佑助は指令棟をあとにした。すると一人の女性が寄ってきた。

佑助の彼女、岩島舞。佑助と同年、パーソナルレベル2+で普段は指令棟のオペレーターをしている。今日はオフなのだろう。

「ねえ、ユウ！お誕生日おめでとう　はい、これプレゼント！！」
舞は恥ずかしそうに小包を渡してきた。佑助は少し照れ臭そうに受け取る。

小包を開けると、真っ赤なマフラーが入っていた。

「宇宙って年中寒いでしょ？だからマフラー編んでみたの！どう？
悪くない出来でしょ！？」

早速マフラーを首にかけた。

「暖かい…サンキュー」舞は笑顔のまま続ける。

「よかったあ…それ編んでたら遅くなっちゃって。じゃあ部屋帰ってパーティ始めよ！」

佑助の言葉に満足して廊下を歩き出す舞にそっと話し掛けた。

「いや、パーティはお預けになった…」

舞はすつと振り返った。困惑している。

「えっ？どういうこと？」

「予定が変更になった。三時間後にここを発つ。だからパーティは帰ってきてからだな。」

佑助は視線を舞から逸らして言った。

「変更になったって…今日はオフになったんじゃないの！？折角のユウの誕生日だって言うのに…何で急に？」

舞は食い下らない。

「キセキの安否確認のためだ。…ゼアールに強襲をかける…」
舞の眼がみるみる見開いていく。

「！！！！？？？ゼアールって…ユウ！！もう危険な事はしないって

約束したじゃん！！可笑しいよ…今頃になって急に…」

その場にへたり込んでしまった。

「今度は本当に死んじゃうかも知れないのに…ねえ？ユウ…考え直すうよ？」

佑助は何も言うことが出来なかった。そつと舞の横を通り過ぎて、背を向けて

「I love you」

そう一言いつて立ち去った。

舞は泣いていた。彼が自分の手元から離れてしまうようで。あの時もそうだった。佑助が暗殺部隊に所属になるときもあんな風にかっこつけていなくなった。今回もそうだ。自分を置いて何処かへ行ってしまふ。彼女に出来ることはただ無事に帰ってくるように祈る事だけだった。

4月21日AM0:45

いつの間にか目をまたいでいた。佑助は宇宙の中にいる。宇宙船に乗っているのは全員で三人。一人は大和。口を開けて爆睡している。もう一人は黒いフードを被ったコックピットに寄り掛かって寝ている巨漢。

ふと舞に貰ったマフラーが眼に入った。綺麗な編み目はまるで売り物のようだ。

端を見るとユウスケと小さく黄色い糸で縫われている。ふっと小さく笑って佑助は眠りにおちた。

魔性の翼

4月21日AM7:10

佑助が起床する頃には他の二人は起きていた。ここは宇宙空間。朝だろーが夜だろーが外は真っ暗だ。時刻を知らせるのは時計のみ。佑助は軽い朝食をとって出撃準備を始めた。

暫くすると目の前のモニターに巨大で真っ黒な星が見えてきた。あれがゼアル星…。これだけ遠くから見ても高層ビル群を大量に確認できる。人工の星なのだ。大きさは地球の約150倍。自然はなく、当然空気も存在していない。それは住んでいる者達が人間で無いことを示している。佑助の肺は人工肺で補われているため問題はない…

次の瞬間、機体に重い衝撃が走った。それと同時に機体内が赤いランプで染まる。鳴り響くサイレンの音

「どうやら敵の襲撃を受けているようだな。」

そう冷静に呟いたのはこの船のパイロット、羽鳥 守。第4番隊隊長である。その巨大な身体を操縦席に持っていき、大袈裟に座り込んだ。

「ぐひゃひゃひゃひゃあ！！人間なめてんじゃねーぞお！？ぶっ殺してやるうゝ！！」

…羽鳥はSuperNovaの中で最も操縦に長けているのだ。その操縦の腕を武器にここまでのしあがってきたほどである。

ここまで宇宙船を上手く操れる人間を佑助は見たことがない。敵が、コイツは戦場となると頭がイカれてしまう魔性野郎なのだ。敵味方関係無くマシンガンをぶちまける、ちよつとアブナイだった。大和と佑助は嫌な予感がしていた。長いこと一緒にいる経験からである。

…やはり二人の予感は的中した。機体が右から左へ大きく揺れる。守は完全に逝ってしまったようだ。こうなるともう誰にも止められ

ない。目の前の敵があつという間に消えて行く。だんだんスピードも上がってきているようだ。ついにスピードが光速に達した。光速は一秒間に地球を七周半できる程早い。もうゼアール星は目と鼻の先である。それでもお構いなしにつき進んで行く。すると羽鳥が言った。

「ぶつつかりまーす！！ご注意くーださーい！！」

「おい、ちよつとまつ…」

佑助が注意した頃にはもう手遅れ。もの凄い爆音と共にゼアール星に着いた。

AM9:12 ゼアール星第4区画にて

佑助達は大量の機械兵に追われていた。隠密作戦のはずが守が派手に正面から侵入したためゼアールの現存戦力が全てこちらに向かつてきたのだ。

通常兵のパーソナルレベルは2++3程度。佑助達なら充分倒せる範囲だがあまりの数にこれでは太刀打ちできない。

今はとにかくこの戦力になるだけ減らすのが最優先だ。佑助は意味もなく酸素ボンベを着けながら大和に聞いた。

「おい、大和。あとどれくらいかかりそうだ？」

大和は例によつてボロボロな白衣からこれまた危険そうな薬品同士を組み合わせている。走りながらなので大変そうだ。

「はあ…はあ…あと、250歩くらいかな？」

後方では守が簡易シールドを張っている。一気に何万という銃弾を受けているため、エネルギーの減りも早かった。

「おい！！もうシールド持たねえぞ！！ヤバくないか！？」

羽鳥も息が上がってきている。佑助はさらにと答えた。

「元と言えばお前の責任だ。後はお前自身が盾になれ。」

「ええ！！…無茶言ふなよ…。」

佑助は冷静だった。いままでこんな修羅場は何百と経験してきているのだ。今更焦る必要などない。

「ユウ…出来た！！なんとか…いけそう！！」

大和から合図があった。佑助は突然立ち止まる。後ろから守の聲が聞こえてきた。

「やっとか…。頼むぜ、大和兄」

クルリと振り返り佑助は叫んだ。

「発射つ！！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8973z/>

銀色の翼

2011年12月28日20時46分発行